



洋泉社 1,942円

「いのち」論のひろげ 村瀬学著

(女子大学助教授)

この一冊は、人が「いのち」とよぶものとは何か……ということを問いつめたものである。「いのちは大事」など大人・子どもが当然のことのように言うが、そこにある生命全体を「平等」に見る考え方に問題はありはしないか。「いのち」には「上下・優劣を示す段階」があることを知らなければ、よく生きることがさえ出来ない……そういったことが語られる。

この「切り口」「論の進め方」「いのち」への考察には、私を含めて多くの人が、常日頃感じながら忘れがちな疑問、あるいは

自己矛盾への深い「切り込み」がある。

著者は「不眠」から「呼吸の仕方」を工夫し、それを克服した。それを後年振り返って、「深呼吸」というものに思いを致し、独自の整体法を生み出した。それは「健康法」などというものに留まらず、そこから独自の「いのち」の理解に達したということである。思想というものが「観念」ではなく、人の生き方と深く結びついていることを証明したということである。これは、フランスの思想家アランに関しても言えることで、村瀬さんはアランを、唯のユニークな哲学者理解に終わらせず、自分で「生きる工夫」を重ねる実践の人として蘇らせている。

この本には、宮澤賢治からDNAの問題まで、グロテスクということからエロティシズムの問題まで、村瀬さんの言葉で一つ一つきちんと語られている。

上野瞭(女子大学名誉教授)



晃洋書房 3,700円

カント倫理学研究 ―内在的超克の試み―

川島秀一著
(大学文学部教授)

前著『カント批判倫理学』以来待望の著作が上梓された。前著が最初期からのカントの根本思想を解明したのに対し、本書はカント倫理学の内在的な換骨脱胎を試み、カントを現代に生かす画期的な著作である。

自愛にのみ生きる者ですら匿名的に格律の法則化を要求しているという意味で道徳法則は「理性の事実」である。この意味で人間は、「道徳的世界内存在」と規定されるが、それは、自己立法という理性意志の自由と、その法則に従う、ないしは反する実存的世界を企投する「選択意志」の自由との「自由の十字

架」を負う存在を意味する。さらに近代合理主義に囚われたカントを歴史的現実にかすために「適法性」の原理である「合目的調和の原理」を復権し、それに基づく「現実的道徳界」という概念を導入する必要がある。人間存在は、理想界に調和すべく企投する自らの相対的な現実的道徳界の普遍的承認を対話を通して要求しつつ、常に「目的の国」という普遍的共同世界への超越の運動の内にある。

本書は以上のような実存論的洞察に加えて、「徳の義務」の詳細論や「嘘論文」の超克的解釈など著者の四十年にわたる研究の成果によって、カントを真に蘇らせる全面的で透徹した論考である。すなわちカント倫理学についての、その射程の広さと密度の濃さを兼ね備えた専門研究書にして、同時に、確実な道を導く啓蒙書を、私たちは遂に手にしたと言えるのである。

工藤和男(大学文学部教授)



勁草書房 2,060円

落合仁司著 地中海の無限者

(大学経済学部教授)

「アジア」と一つにくくることに無理があるように、「ヨーロッパ」と一つにくくることに、多くの問題がある。われわれのヨーロッパ学が成熟したという証は、ヨーロッパの内部に走る差異の線をどれだけ微細にみさえ、その観察をもとにしてどれだけ魅惑的なヨーロッパの動力学を構築できるか、ということをおいてほかにはない。その意味で、本書は充分にわれわれの熟成の証明となっている。

畏怖すべき野心とも情熱ともいべき本書の目標は、今まで等閑視されてきた東方キリスト教の姿を明らかにすること(西方カトリックと東方正教の差異

を確認することは、ヨーロッパの本質をみきわめることになるだろう)、東方キリスト教の教義をカントルの無限集合論によって証明することである。二つは同時併行的な作業であり、二つが重なるところに、著者のいう「数理神学」が成立する。

著者よりかなりナイーヴなものではあれ、ロシアのプロレンスキイもカントルを援用しながら、八〇年余りに同様の試みをしている(『真理の柱と証明』二九一四)。彼はあらゆる記号を「シンボル」とみなし、その中に神の真理をさぐった。著者の実験的思考は、フロレンスキイの試みをひきつぐものともいえよう。

最後に、物分りのおそい評者として一つ注文がある。信仰に関する「内なる智慧」とパイディア、「外なる知恵」が交わる必然性について、もう少し色いろと訊いてみたい。

大石雅彦(大学言語文化教育研究センター助教授)



中央公論社 699円

(女子大学教授) 児玉実英著 アメリカのジャポニズム ―美術・工芸を超えた日本志向―

児玉実英氏は日本のさまざまな文化がアメリカ詩に及ぼした影響をかつて研究したが、アメリカ文化のあらゆる面での日本の影響を改めて考察したのがこの書物である。アメリカのジャポニズムは、一八五〇年代から一九二〇年頃の間起こり、日本への興味・日本の事物に対する関心や愛好心が、文学のみならず、キモノなどの服飾や、絵画・版画・建築・庭園・家具・陶芸などの面で見られた。陶芸品や版画などを愉しむだけでな

く、日本のものに触発されて、模倣したり、題材にとり入れたり、技法や思想を学んだりして、自分達の製作・創造に生かすのが、アメリカのジャポニズムの特色だった。児玉氏はかなりの資料・文献を駆使し、多くの図版によって、具体的・実証的に作品研究風に論じている。オペラ『蝶々夫人』は、もとの小説をかなり手直した芝居に基づいて、美しく悲しい日本女性を描き、家具、調度品を舞台で見せて、ジャポニズムのクライマックスを象徴していた。しかし、ジャポニズムそのものの思想的基盤の薄弱さ、近代化に伴う古きよき日本文化の衰退、そして日本の軍国主義的帝国への変貌による日本脅威論などがこのジャポニズムの衰退を促したと、児玉氏は論じている。アメリカ人にも読ませたいと同時に、われわれが日本文化を見直すきっかけにしたい書物である。

松山信直(大学名誉教授)



成文堂 4,000円

（大学法学部教授） 瀬川晃著 イギリス刑事法の 現代的发展

本書は、ダイナミックで目まぐるしく展開するイギリス刑事法の動向を、ヴィヴィッドに描き出したものである。著者は、同国の政治的・社会的状況を踏まえ刑事法全体を見渡す幅広い視点から、今日の動きをフォローし、鋭い分析力と精密な論理展開により、現代イギリス刑事法が直面する課題と展望を探る。

本書の構成は三部から成り、第一部で刑事法全般の動きを概観し、第二部で刑事政策、第三部で犯罪学の各個別テーマを扱う。ところで、イギリスでは、戦後、刑法、刑事訴訟法、刑事

政策の領域で種々の改革や立法化が続けられている。本書は、戦後の刑事立法の変遷を回顧し、刑事手続法の立法化や、コンピュータ犯罪等新しい犯罪現象に対応した刑事立法を紹介するとともに、人道化・近代化の理念の実現の時代からコントロール強化に移行した刑罰制度の見直しの状況を明らかにしている。特に刑事政策の分野では、拘禁刑、社会内処遇、常習犯罪者の処偶や仮釈放等の問題に関する現状と課題の分析は、学べき点が多い。また、犯罪増加とサッチャーの「法と秩序」政策を背景として台頭した保守的な犯罪学に対抗して、左翼的なニュー・クリミノロジーも、近年、観念的議論を脱皮して実証主義的方向をとりつつあるとの指摘は興味深い。

本書を、イギリスの刑事立法、犯罪や社会状況に関心のある人に必読書として薦める。

奥村正雄（清和大学法学部教授）



有斐閣 1,650円

（大学法学部教授） 安枝英伸著 労働の法と政策

周知のとおり、社会経済情勢に大きな変化が進行しつつある。労働の現場やこれを規整してきた労働法の領域も様々な変更を迫られている。そうした中にあつては、労働問題を処理するどのような新たなルールを設定するかということともに、労働の現場に、その新たなルールが受け入れられる状況をどう創り出すが重要な意味を持ってきている。そして後者の視点では、一定の政策目的の実現をめざす政策立法の策定とその効果的な実施が決定的な役割を果

たす。

本書は、「はしがき」にもあるとおり、この政策立法という視点を意識的にとりあげ、ルール設定というこれまでの労働法の視点にこの視点を新たに加えて、法の機能と役割を整理し直している（第一部）。さらにこの視点から問題となっている女性、高齢者、パートタイマー、外国人の各労働者の問題状況と法政策上の対応について分析する（第三部）。これまでの労働法についての基本的な解説である第二部に第一部、第三部を加えてはじめて「現代」労働法の全体像の把握が可能となるとの認識がそこにはある。

本書は、初学者の現代法入門と銘打たれているが、社会経済情勢の変化に対し創造的な対応を求められ始めている人事・労務や労働組合活動に身を置く者や、政策立案の任ある者等にも有益な内容となっている。

柳屋孝安（関西学院大学法学部助教授）



京都新聞社 1,200円

経済天気図25年 杉江雅彦著

(大学商学部教授)

本書は、著者が一九七〇年から九三年までの四半世紀にわたり、京都新聞経済欄の『経済天気図』に寄稿したコラム記事の中から、主として金融経済に関連した一二〇編を選び出し、それに現時点での著者のコメントが付された構成となっている。掲載内容は、証券、銀行、郵貯、財政、為替から商品先物取引にわたり、著者の広範な関心の一端を覗かせている。

経済欄とはいえ、一般日刊紙に掲載するのであるから、諸々

の制約がある。文章は簡潔明快にして達意のものでなければならぬし、テーマはその時々の問題意識を以て選ばなければならない。しかも、一冊に纏めて刊行するのに値する(執筆当初から計画されたことではないだけに)記事を書くことは、至難の技であると思うが、著者には些事であるかのような。例えば、二五年前の『投資家同盟』の結成を『というコラムは、『真剣に「投資家主権」を考えない企業や証券界』を叱正したものである。今日でこそ投資家不在の配当政策が問題視されているが、著者の視点は鋭い。

大学での教育、研究の傍ら、テレビ、ラジオから日刊紙、雑誌へと、著者の幅広く情熱的な活動はつとに知られている。難しいテーマをやさしく書くことは、才人にして雅を知る人であれば不可能である。同志社人に一読を勧めたい一巻である。

神木良三(大阪商業大学商経学部教授)

現代アメリカ経済研究 藤原秀夫・同志社大学アメリカ研究所編著 現代アメリカ経済研究

晃洋書房 三、八〇〇円

本書の特徴は、現代アメリカ経済を、その経済的覇権の衰退という大きな視点を踏まえながら、その過程で出てきた幾つかの重要なテーマについて既存の業績のサーベイを行い、さらに独自の分析を展開しているという点である。具体的に、本書の内容と構成は以下の通りである。

まず序章では、バックス・ブリタニカからバックス・アメリカナの確立およびその相対的衰退について分析され、歴史的な実例に基づいて覇権体制の安定する条件、さらにその安定性がどのように動揺していくのかが明らかにされている。一章から三章では、国際通貨制度に着

目し戦後のIMF体制下で基軸通貨としてのドルの機能、役割の変化が論じられ、また昨今の国際協調体制について分析されている。四章から七章までは、金融制度・政策運営の変遷について詳細な分析が行われると同時に、八〇年以後見られた金融不安定性が生じた現象への理論分析が展開されている。さらに実物経済の側面として、八章では所得分配と所得不平等化の問題、九章では設備投資行動と対外競争力について実証分析が行われている。十章においては、日米貿易経済摩擦の歴史的経緯について解説を加え問題点を整理している。

本書は、現代アメリカ経済分析の主要なテーマについて、歴史・制度・理論・実証的に幅広く分析されており、読者は世界経済の枠組みの中で今後のアメリカの果たす役割について深く認識できるものと思われる。

植田宏文(大学商学部専任講師)



中央経済社 2,718円

伊多波良雄著 地方財政システムと 地方分権

(大学経済学部教授)
日本経済は中央政府の監視や指導のもとで、中央集権的なシステムとして運営されてきた。しかし、多様化やボーダーレス化の進展によりこのようなシステムではすべての国民の欲求に応えることが困難になり、規制緩和や地方分権を進めて、分権的なシステムへ移行することが迫られている。それでは、なぜ分権的なシステムが求められているのであろうか。本書は、この問いに対して、地方財政学の立場から真正面に答えようとするものである。

るものである。

第一章から第三章において、資源配分の効率性からみた地方分権の意味と、効率的な配分に失敗した場合に中央政府が介入することの根拠について、理論的な基礎が示される。第四章から第八章までは、地方税制や補助金等の具体的な地方財政システムの意味について、明らかにされた理論的な枠組みの中で検証が行われる。第九、十章では財政が果たす資源配分以外の機能について、地方財政の立場から論じられ、最後の第十一章で地方分権の意義と課題がまとめられている。

本書は、地方財政学のテキストとして書かれた。しかし、その内容は、最適都市規模に関する都市経済学の近年の成果を踏まえ、地方財政学に新たな理論的基礎の構築を試みる、テキストの域を越えた意欲的な著作である。

徳岡一幸 (大学経済学部助教授)



法政出版 900円

横山卓雄著 あなたの下にも活断層

時として自然の力は脅威だ。

一九九五年一月十七日に起こった大地の揺れは、一方的に自然に逆襲を受けたようなものだった。地震は予知できず、皮肉にも私たちは本来的に自然に生かされて存在するものであることを知らされた。人々の運命は左右され、瞬時にして経済大国といわれる豊かさはその脆さを露呈し、今なお大きく影を落とす続けている。

阪神大震災は、天災、人災と言われながらも貴重な教訓を残した。災害に対する都市の整備や社会制度の遅れは明白のもの

となった。そして、地震列島に住む宿命を背負ってきたにも関わらず、あまりにも地震のメカニズムを知る機会に恵まれず、備えも十分でなかったことを痛感した。それらは近代技術文明の落とし穴に私たちがはまっていた結果かもしれない。

本書は、それら地震災害を巡る様々な問題点を、科学者の視点で、多くの情報を吟味し事実を検証するなか、明らかにしている。そして、活断層の存在も地球史の必然として解きながら、逃れられない地震災害に対して、地震と付き合うという視点で私たちがとるべき道筋を教えてくれている。その事は、地球という生命体と共生していくことを暗示しているようである。さらに、その延長線上には人と人との助け合いが作る共生社会の必要性も問うことになるであろう。

久山喜久雄

(工学部・工学研究科事務室研究室係長)



弘文堂 1,800円

(大学総合政策科学研究科長・法学部教授)
大谷實著

精神科医療の法と人権

本書は、刑事法並びに医事法の第一人者である著者が、精神科医療における法と人権を簡にして要を得て述べられたものであり、法の仕組みを解説するとともに人権について検討を行い、精神科医療法制の在り方についての抜本的検討が加えられている。精神医療では、意思能力が欠ける患者の保護のために強制的に医療を行うことがあるから、法による規制と患者の人権保護が重要な課題となるのであるが、本書では、精神医療と法の概説および歴史を述べた

後で、精神疾患に関する国連原則を取り上げ、患者の人権について、インフォームド・コンセント(IC)を中心に検討が加えられている。著者は、国連原則を「パターナリズムを基礎としつつ個人の自己決定を尊重する思想に立脚するもの」として高い評価を与えたうえで、ICは、患者の病気の回復と自己決定権との間の矛盾の相克として認められるべきであり、自己決定の尊重は患者の利益を確保するために必要となるものであるから、自己決定を絶対視するのは妥当でないとされている。人権救済制度について触れた後で、今後の課題として、地域精神科医療の確立によって精神障害者の社会復帰を促進することが挙げられている。精神病院から社会復帰施設へ、そして、「社会復帰施設から地域社会へ」ということが精神科医療の究極の理念なのである。

川本哲郎(京都学園大学助教授)

(大学商学部教授)
岡本博公著

現代企業の生・販統合

新評論 三、六〇五円

近年、戦略提携や製販同盟という言葉が流布し、メーカーと流通業の関係への関心が急速に高まってきている。本書は時代の最重要テーマの一つとして再浮上した生産と販売の統合に焦点を当てた力作である。本書の課題は、多品種・多仕様生産を大量生産システムの上にのせるにはフレキシブル生産システムの構築が必要であり、そのためには生産と販売の統合システムが要請されるが、それがどのようにに進められているのかを明らかにすることである。そのことを正確な需要予測と、生産の計画時間とリードタイムの短縮という二つの観点から解明しようとしている。

本書の特徴は、第一に、フレ

キシブル生産システムをたんに生産の問題に限定せず、生産と販売のインターフェース問題としてとらえた点である。このことは生産システム研究にインパクトを与えるのはもちろんのこと、流通研究にも新しい観点を提供するものである。第二に、生販システムにおける産業・企業間の相違を分析することでこのシステムの特徴をより鮮明に浮かび上がらせている点である。すなわち、生販システムの形成は当該業界の生産技術や市場ニーズ、各社の多品種・多仕様化の程度によって規定される。最後に、自動車・鉄鋼・半導体企業等七十社強への十年間の聞き取り調査に基づく実証研究であるという点である。十年前にすでにこういったテーマに着目していた著者の慧眼と、長期間一つのテーマを探究し続けた研究者としての姿勢に敬意を表したい。

尾崎久仁博(大学商学部助教授)

(女子大学教授)
児玉実英、

Nicholas Teeleほか編著
**A Guide to Ezra Pound
and Ernest Fenollosa's
Classic Noh Theatre of
Japan**

National Poetry Foundation

本書はエズラ・パウンド生誕百年を記念して行われた研究の結実である。パウンド (Ezra Pound, 1885—1972) はイエーツ、T・S・エリオット、J・ジョイス等と交流があり、英米詩革新運動のリーダーであったが、未完の大作『キャンントウズ』(*The Cantos*, 1917—1969) の難解さ故にか、詩人としての評価は大きく分れる。『キャンントウズ』はコラージュ手法を駆使し、東西の広範な事象や人物に言及、その上、叙述・引用として十か国語以上を使用する。しかも、その言及は原文を翻訳改作したものも多く、注もついでい

ない。故に難解なのである。謡曲も引用されており、重要な構成要素となっている。

引用を駆使しながらイメージを重ねていくコラージュ手法は、日常慣習的な視点からの線状的読みではなく、多様な視点からの空間的・共時的・ゲシュタルト的読みを要求し、本歌取り・本説取り・縁語・懸詞を駆使する夢幻能のテキスト(謡曲)が要求する読みでもある。パウンドは、この手法をフェノロサ(Ernest Fenollosa, 1853—1908)の遺稿から学んだ。

本書は『キャンントウズ』で謡曲がどのように解釈・改作、引用されているのかを論じている。イエール大学所蔵のフェノロサの遺稿と、それを下敷にしたパウンドの翻訳との比較も行っており、パウンドの謡曲解釈の視点が分かる。世界のパウンド研究に貢献する、意義ある研究書である。

越智礼子 文学言語文化教育研究センター専任講師

(大学法学部教授)
田井義信著

**イギリス損害賠償法の
理論**

有信堂 四、〇〇〇円

本書は、著者が、長年イギリスの損害賠償法、特に損害賠償の範囲とその画定方法に関心を持たれ、ネグリジェンスの成立要件、経済的損害の賠償等を中心に研究され、公にされた成果の一部をまとめられたものである。五部から成り、大変明晰でわかりやすく書かれてある。まず、「第1部 財産的損害の賠償」では、ネグリジェンスの意味内容と要件を考察した後、損害賠償の範囲画定の問題へと進まれる。著者は、より重要なのは判決理由の法的構成の背後にある価値判断要素の抽出作業であると総括される。「第2部 非財産的損害の賠償」は、苦痛、余命の期待の喪失、快適さの喪失という3種類の非財産的損害

や懲罰的損害賠償につき検討がなされ、「第3部 慰謝料の算定」へと続く。「第4部 不法行為責任の拡大」では、経済的損害の賠償の可否につき判例を分析され、賠償否定原則から特別事情があれば賠償範囲に入ることになったが、一九八六年を境に動揺が見られると論じられる。「第5部 共同不法行為」では、要件論と求償や、一九七八年の民事責任(求償)法の内容・特色を紹介される。著者は、イギリス法なりの考え方で損害の合理的分担の決定が考慮され、紛争の迅速かつ一回的解決が意識されている旨指摘される。

思い起こせば、評者が損害賠償法の研究を始めた頃、田井先生の論文をよく読んだものである。それだけに、本書の公刊は評者にとっても誠に感慨深く、これを機に改めて勉強させて頂くとともに、先生の益々のご発展を祈願したい。

岡本友子 (広島大学法学部助教授)